

資料館だより

企画・編集 国立ハンセン病資料館

発行 公益財団法人
日本財団

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

電話 042-396-2909

FAX 042-396-2981

URL <http://www.hansen-dis.jp>

新しい年を迎えて

国立ハンセン病資料館

館長 成田 稔

あけましておめでとうございます

二〇〇八年に制定された「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」(通称「ハンセン病問題基本法」)の「第4章 名誉の回復及び死没者の追悼」第18条には、「国は、ハンセン病の患者であった者等の名誉の回復を図るため、国立のハンセン病資料館の設置、歴史的建造物の保存等ハンセン病及びハンセン病対策の歴史に関する正しい知識の普及啓発その他必要な措置を講ずる(以下引用者略)」とあります。

ハンセン病患者・回復者とその家族が、過去の誤ったハンセン病対策によって傷つけられてきたことはご承知のとおりです。その結果が、世間の人びとからの法外な差別でした。一旦ハンセン病と診断されれば、否応なくこうした扱いを受けるのですから、患者本人はもちろんその一族の人びとが、ハンセン病との関わりを隠そうとしたのは当然です。

現在の日本ではハンセン病の年間新患者発生数は、ほぼゼロと

万が一発病しても外来診療で済み、今や歴史上の対応でしかない隔離の強制など、決して行われることはありません。これほどまでに状況の一変した今日、ハンセン病を自ら明かす(罹病は個人情報ですから他から明かされることはありません)のは、別にどうこう言うことでもないはずですが、隠すということについては、新発生患者でさえ昔と変わらないのではないのでしょうか。

自分自身の何かを隠すのは、それを知られることが世の人びとからの差別や偏見を招き、自身の人間として生きる根本を揺るがすことと恐れるからでもあります。病歴を隠し通すために、つきたくもない嘘を重ねることもあった(ある)と聞きます。そうまでして、隠しごとを抱えながら生きることがどれだけ辛いのか、想像してみてください。

ハンセン病はかつては不治の病として、人びとに恐れられ、避けられてきました。それが化学療法法の進歩によって事態は一変しました。治療は3、4種の化学療法剤による多剤併用療法が主となり、短時日のうちに菌は増殖性を失い、

実質的に感染源ではなくなります。治療には6ヵ月から2、3年と少々期日を要しますが、治療中にそれまでの日常生活を変更する必要はありません。これでは普通の人の暮らしと変わりませんから、「病人らしくない病人」であり、人づきあひも変わらないわけで、月に一度ほど通院し薬を処方してもらおう「普通の病気」というわけです。

日本は、新型インフルエンザの流行の兆しがあると聞いただけでマスク売り場の品物が瞬く間に消えるという、衛生志向の強いお国柄です。病気への心配りは十分でしょうから、どのような病気にもそれなりの関心は持つてもらえるはずです。ここでの関心とは正しい知識を持つことであり、それによつて病気への不安を減らすことができるということです。

ハンセン病は、医師が正しい治療を行い、患者がそれをきちんと受けてさえいれば、患者本人も、家族も、私たち周りの人にとつても、特別隠すことはありません。「大変です」(これは病人から病気を告げられたときの決まり文句です)といった

お見舞いの言葉を交わす程度のかかりでよいはずの病気なのです。はじめに引用したように「ハンセン病問題基本法」では、ハンセン病及びハンセン病対策の歴史に関する正しい知識の普及啓発その他必要な措置によつて名誉回復を図るとされていますが、この負の歴史は膨大です。ここではハンセン病に対する偏見の解消に向けて、わかりやすい現状の知識のほうを極めておさげにまとめてみました。負の歴史の正しい理解をもつて偏見を正すのはもつと大切です。ハンセン病患者・回復者が、何のためらいもなく、必要に応じて病気のことを明かすことができ、そのための努力を本年も積み重ねていく所存です。今年もぜひ当館へお越し下さい。



桃生小富士「早春の詩(紅梅白梅と目玉)」二〇〇一年

全生病院時代「空堀」の調査①

全生学園の建物基礎も確認

資料館は、多磨全生園と入所者自治会の協力を得て、昨年度に続き、全生病院草創期に「患者地区」を囲った土塁・堀に関する多磨全生園内での考古学調査を行ってゐる。今年度は、全生学園跡地にて11月15日（火）に調査を開始した。学園跡地は全生病院開設時の敷地南東隅にあたり、資料館所蔵の写真資料や「全生病院構内略図」等を精査することによって、旧学園の真下に堀が埋没していることが確認視されていたからである。

まず調査が許された範囲の敷地（南北10m×東西20m）の東辺・西辺に細長い試掘坑を2ヶ所設けて、東西方向に埋没している堀の位置について探査した。すると程なく予想に違わず、地表下30cmレベルにおいて黄褐色の関東ローム層の地山を掘り込んだ幅約4mの堀の埋没を確認した。続いて堀を埋め立てている黒色土・ローム層由来の土砂（覆土）を人力で掘削していったところ、堀底まで2m余りある、断面逆台形の堀がきわめて良好な状態で遺存していることが判明した（写真1）。

まで「山桜」11巻3号、一九二九年3月）、今回の調査でほぼ記述に見合う堀の規模を確認できた。

しかし今回の調査では、試掘坑で堀の良好な埋没を確認したところで、一気に調査を進めるわけにいかないもう一つの課題があった。全生学園の跡地の調査である。

一九七九年の閉校後も二〇〇八年に老朽化のため取り壊されるまで存在していた全生学園（一九五三年以降は東村山市の小・中学校の分教室）の建物は、療養所に収容された子どもたちの学び舎で、建物解体を惜しむ声を今でも時折耳にすることがある。上屋こそ失ってしまったが、今回の発掘調査によって建物の基礎を地下遺構として確認し、その位置や構造を正確に測量できる可能性があるため、資料館では考えていたのである。

すると確かに、埋没する堀の上部に重複して構築された学園の建物の基礎、および付設された土管による排水設備等の痕跡を良好な状態で確認することができた（写真2）。土塁・堀とともに、非常に貴重な成果である。

全生学園は一九三〇年に建設が始まっており、一方で調査地点の堀は一九二五年までに埋め立てられている。土塁・堀の構築は一九〇九年であったので、それらが「我

と彼」を隔てる施設として機能したのは20年に満たない期間であったことになる。今回の発掘調査によって、堀から学園建物への遺構の重複・変遷を考古学的に記録できたことになる。



写真1：「空堀」の確認状況



写真2：全生学園の建物基礎の検出状況

ハンセン病ファッションアート展

11月6日（日）から19日（土）まで、資料館ギャラリーにおいて「ハンセン病×ファッション×アート展」が開催された。主催はテンボデザイン事務所。

テンボは二〇一六年秋の東京コレクションで、ハンセン病への差別をなくすることを目的に掲げ、ハンセン病をテーマとした作品を発表した。多磨全生園入所者の横ミヨ氏が、モデルとしてランウェイを歩いた。今回のアート展は、東京コレクションで発表した作品などを展示したもの。

11月13日（日）には、横氏、鶴田能史氏（テンボ代表）、田川誠



氏（デザイン画担当）によるトークイベントが、資料館映像ホールで開催された。鶴田氏は、ファッションは誰もが親しみやすいもので、ハンセン病問題に興味がない人にメッセージを届けるための有効なツールであることを強調した。そして、モデルデビューを果たした横氏は、「このような幸せなことが83歳になってめぐってきたことは、すごく嬉しかった」と、その感激を口にした。

お知らせ

若松若太夫師匠の 説教節の公演を 行います

国立ハンセン病資料館では、来る2月18日（土）に三代目若松若太夫師匠をお招きして、説教節の公演会を開催いたします。

演目として、背景に往古の日本社会とハンセン病との関連も窺える「小栗判官」「しんとく丸」を予定しております。

東京都指定無形文化財の保持者でもある若松若太夫師匠の迫真の弾き語りの世界をご一緒に堪能しませんか。

場所…資料館1階映像ホール
開演時間…13時30分（開場13時）
入場無料、先着二〇名まで
※詳しくは当館ホームページをご覧ください。

その3 資料館の現場から

今回は展示について紹介します。博物館には教育普及の手段として、いくつものやり方があります。その中でも展示は、博物館にとつて最も特徴的で不可欠な方法です。展示という手段を一切用いることなく何かを伝えるようにする施設を博物館とは呼ばないように、教育普及の場において、展示は博物館であることの条件です。

ところで展示と一口に言っても、タイプは様々です。例えば歴史展示はストーリーとしてつながりを伝えようとする場合が多く、考古や民俗の展示は個々の資料を単体として見せていく傾向があります。美術展示はそれぞれの作品の魅力を引き立てようとしています。歴史博物館は歴史展示、美術館は美術展示のタイプを主に用いて展示を行うわけですが、複数の分野を扱っている総合博物館では、いくつかのタイプを併用しています。

さらに展示には、その博物館のメインテーマを扱う常設展示と、テーマや期間を定めて行う企画展示があります。両者は、企画展示のための調査研究を通して新たな知見や資料を入手し、常設展示に反映させる、循環の関係にあります。展示は一度作っておしまいという訳ではなく、少しずつつずつ変化していきます。

さて、当館の展示はどうでしょ

うか。常設展示室1で日本のハンセン病対策の歴史、展示室2で化学療法以前の療養所内の生活、展示室3で文化活動や医学的情報を展示しています。展示室2では、患者・回復者がいかに苛酷な状況に置かれていたのか、展示室3ではいかに生き抜いてきたのかを主にご覧いただき、展示室1はそれらをより受け取りやすくするため基礎知識といった役割分担になっています。

これら柱となるテーマ設定は、開館以来変わっていません。前述の展示のタイプに照らしてみると、歴史・民俗・美術・医学の分野に渡っており、総合博物館的な性格を持つていることが分かります。そのため当館の学芸員には、いくつもの展示のタイプを使いこなせるようになることが求められます。しかし展示表現の技術を教えてくれる場は、日本にはほとんどなく、容易なことではありません。他所の多くの展示を見、自分で実際にやってみる以外に、学ぶ方法がないのです。当館では、年に2回企画展を開催しており、学芸員がシナリオを作り、資料を選び、設営作業を行います。これが展示表現を学ぶ貴重な場ともなっています。また、企画展のテーマを決める基準の1つは、常設展示で十分に取上げられていないことです。それを企画展で補い、常設展示に反映させたいと考えています。

第4回多磨全生園 絵画展開催

1月11日(水)から、当館ギャラリーで「第4回多磨全生園絵画展」を開催する。昨年11月に開催された全生園まつりからの巡回展で、東村山市内の小中学生が多磨全生園を題材に描いた作品が並ぶ。今回は小学生の部で応募数87点中入選15点、中学生の部で応募数74点中入選18点の、合計33点を展示する。

例年通り、今回も力作揃いだ。児童・生徒たちが写生して描いた場所は、それぞれの心の琴線に触れた、いわば「全生園おススメスポット」ということだ。絵をご覧いただくのはもちろん、展覧会を見た後、描かれた場所を実際に訪れてみてはいかがだろうか。会期は2月12日(日)まで。



邑久光明園に 社会交流会館 常設展示室オープン

前号既報のとおり、国立療養所邑久光明園の社会交流会館がオープンし、10月17日(月)に完成記念式典が催された。

1階には常設展示「隔離から解放へ」邑久光明園の歩み」が設けられ、外島保養院時代から現在に至る同園の詳細な年表や、豊富な写真・実物資料が展示されている。室中央では療養生活をめぐる入所者の証言などの映像を見ることのできる。エントランス右手の社会交流スペースにはクロージャー楽団や消防団の活動、絵画・書・陶芸などの紹介とともに、休憩スペースも設けられている。

開館は平日午前10時～午後4時まで、団体見学や土日祝日の見学は邑久光明園庶務課に要連絡。



完成記念式典当日の常設展示室

ハンセン病問題シンポジウム 2月に神戸で開催

来る2月4日(土)、第16回ハンセン病問題に関するシンポジウム(入権フォーラム2017 in 兵庫)が開催される。主催は厚生労働省、法務省、兵庫県、全国人権擁護委員連合会。

同シンポジウムはハンセン病やエイズなどに対する正しい理解を深め、差別や偏見のない社会づくりを目指すもの。武庫川女子大学附属高等学校放送部が司会を担当し、親和中学校・親和女子高等学校コーラス部による歌で開会の後、パネルディスカッションと演劇が行われる予定。

パネリストは以下(掲載順・記載内容はリーフレットに拠る)。コディネーター・黒尾和久(国立ハンセン病資料館学芸部長)、パネリスト・屋敷司(邑久光明園入所者自治会会長)、宮良正吉(ハンセン病関西退所者原告団いちようの会長)、加藤めぐみ(社会福祉法人恩賜財団大阪府済生会コディネーター)、大槻倫子(弁護士)、長谷川亜衣加(大手前大学総合文化学部2年)、三河みずき(同前)。

演劇は沖繩の中・高・専門・大学生たちによる「光の扉を開けて」。入場無料、13時～16時30分。会場は神戸文化ホール(中ホール)。問い合わせは同シンポジウム事務局(TEL 078-230-3310)。